

## SDGsをめざし共同宣言

### 手紙・TV電話で交流重ね

世界の貧困を考え、文化を尊重し合いながら平和な社会を実現させよう――。晃華学園（調布市）の中学生と、アフリカ南東部のマラウイ共和国の小学生が、持続可能な開発を目指して共同宣言を出した。テレビ電話や手紙のやりとりを通じて、「実際の生活を見ることができ、わくわくした。これからも交流を続けたい」と振り返る。

晃華学園では、国連が提唱する「持続可能な開発目標（SDGs）」について、授業などで取りあげている。今回、社会科の松元賢次郎教諭（28）の友人である長井優希乃さん（28）が青年海外協力隊としてマラウイに派遣されている縁があり、交流が実現した。7月には共同宣言に両校が署名した。「より多くの木を植えます」「壊れてしまったものをリサイクルして何度も使います」などを掲げている。

最初は手紙のやりとりから始まった。「好きな食べ物

マタピラ小から贈られた廃材で作られたおもちゃや手紙を手取る生徒たち―調布市の晃華学園

物は何ですか？」「休日は何をしていますか」。晃華学園の中学3年生からの問いに、マラウイのマタピ



ラ小の6年生は「洗濯をして一日が終わります」「エイズが心配です」。驚くことも多かった半面、家族を大切に思い、近所の人と助け合う姿も伝わった。大中原紗さん（14）は「GDPも低い国だが、心はすごく豊かだと感じた」と振り返る。

マラウイでは資源が少ないため、廃材でおもちゃを

作ったり、壊れた物も簡単には捨てずに直して使ったりする。一方で「日本では賞味期限が切れたからといって食べられるものを捨てている。マラウイの人たちはこの状況を伝えるのはとても難しかった」と梶花音さん（15）。

7時間の時差があるが、テレビ電話を通じて自己紹介などもした。「本当



晃華学園の生徒に手紙を書くマタピラ小の生徒たち―長井優希乃さん提供

に友達のように。あつという間に垣根を越えてしまします」と松元教諭は話す。

約3カ月間かけてまとめた共同宣言では、お互いが対等な関係であること意識した。前文に「すべての人が平等な機会を持ち」と入れたのも、そんな思いからだ。八田柚香さん（14）は「日本だけでSDGsの目標に向かうのではなく、世界単位で考えた方がいいと感じた」と振り返る。

両校の架け橋となった長井さんは「マタピラの子どもたちの中に『日本の友人のために何かしてあげたい』という主体的な視点が育まれたことが、最もうれしく尊い成果だと感じます」とコメントした。

8月末には、日本マラウイ協会が主催する「マラウイを語る集い2019」で、共同宣言についてセッションも行った。マラウイとの交流は今後も続けていきたいという。